

第43回 信行寺仏教講座（和讃篇）
～第2首「智慧の光明はかりなし」～

令和6年8月18日（日）

智慧の光明はかりなし 有量の諸相ことごとく
光暁かぶらぬものはなし 真実明に帰命せよ

（現代語訳）

阿弥陀仏の智慧の光明は限りがない。迷いの世界のもので、照らされないものはない。真実の智慧の光である真実明に帰命するがよい。

出典

七高僧の第3祖・曇鸞大師
『讃阿弥陀仏偈』



智慧の光明量るべからず。ゆえに
仏をまた無量光と号けたてまつる。
有量の諸相、光暁を蒙る。このゆ
えに真実明を稽首したてまつる。

この一首は直前の、

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなし 世の盲冥をてらすなり

と詠われた「法身の光輪」について讃嘆される。
これから後に詳しく十二の光で讃えられ、阿弥陀仏
に帰命せよと勧められている。

光明による救い（十二光）

「正信念仏偈」

普放無量無辺光 無礙無対光炎王 清浄歓喜智慧光
 不断難思無称光 超日月光照塵刹 一切群生蒙光照

本願を成就された仏は、無量光・無辺光・無礙光・無対光・炎王光・清浄光・歓喜光・智慧光・不断光・難思光・無称光・超日月光とたとえられる光明を放って、広く全ての国々を照らし、全ての衆生はその光明に照らされる。

- ①無量光 ⇒ よろずの衆生が光をこうむって、なお余りがある。
- ②無辺光 ⇒ あらゆる方向に際限なくゆきわたる光
- ③無礙光 ⇒ 煩悩を妨げとしない救い
- ④無対光 ⇒ 相対するものがない最上の光
- ⑤炎王光 ⇒ 火炎がさかんであること、光明中の王であり最勝である
- ⑥清浄光 ⇒ 貪欲（むさぼり）の心を破ってくださる
- ⑦歓喜光 ⇒ 瞋恚（いかり）の心を破ってくださる
- ⑧智慧光 ⇒ 愚痴（おろかさ）の心を破ってくださる
 ※生きているうちに煩悩が無くなるわけではない
 果を引かない
- ⑨不断光 ⇒ 決して絶えることのない不断の光
- ⑩難思光 ⇒ 私の思考が及ばない、人知を超えた光
- ⑪無称光 ⇒ 言説では称説することが出来ない光
- ⑫超日月光 ⇒ 太陽や月の光に比較出来ないほど勝れている光

第十三首	第十二首	第十一首	第十首	第九首	第八首	第七首	第六首	第五首	第四首	第三首	第二首
超日月光となつてたり	無称光仏となつてたり	難思光となつてたり	不断光となつてたり	智慧光となつてたり	法喜をうとぞのべたまふ	清浄光仏とまうすなり	光炎王仏となつてたり	清浄光明ならびなし	一切の有碍にさはりなし	解脱の光輪きはもなし	智慧の光明はかりなし
超日月光	無称光	難思光	不断光	智慧光	歓喜光	清浄光	炎王光	無対光	無碍光	無辺光	無量光

「讚阿弥陀仏偈」と十二光

なぜ「光」で喩えられるのか？

ひそかにおもみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。（『教行信証』総序）

（わたしなりに考えてみると、思いはかることのできない阿弥陀仏の本願は、渡ることのできない迷いの海を渡してくださる大きな船であり、何ものにもさまたげられないその光明は、煩悩の闇を破ってくださる智慧の輝きである）



親鸞聖人「熊皮の御影」

闇をどけようとしても、どうにもならぬ。
闇を亡くすには、光を灯すしかない。

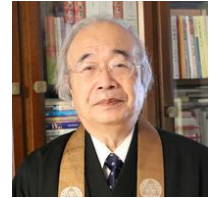
(雲山龍珠和上『信仰説話』)

雲山 龍珠 (くもやま りゅうじゅ) …

本願寺派勸学。仏教大学 (現龍谷大学) 教授を経て勸学寮頭に任ぜられる。『正信偈講義』など著書も多い。昭和31年寂、85才。

大田利生 (『大乘』2016, 6月号)

闇の方から光に向かうのではなく、光の方からこちらに至りとどいて闇が去ります。このように、光から闇へという方向は、如より来生するという如来の意味をうかがわせませぬ。私の方から如来に近づくのではなく、救いの手は如来の方から差し伸べられているのです。



大田利生和上 (勸学)

阿弥陀仏の誓願 (四十八願)

第十二願・・・光明無量の願

わたしが仏になるとき、光明に限りがあって、数限りない仏がたの国々を照らさないようなら、わたしは決してさとりを開きませぬ。

第十三願・・・寿命無量の願

わたしが仏になるとき、寿命に限りがあって、はかり知れない遠い未来にでも尽きることがあるようなら、わたしは決してさとりを開きませぬ。

「阿弥陀仏」の名前に込められた意味

アミターバ (Amitabh / 無量光)

「限りなき光をもつ者」

⇒ 空間的無限 (どこでも)

アミターユス (Amitāyus / 無量寿)

「限りなき寿命をもつ者」

⇒ 時間的無限 (いつでも)

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり
⇒ 寿命無量の徳を讃える（いま）

法身の光輪きはもなし 世の盲冥をてらすなり
⇒ 光明無量の徳を讃える（ここ）

「いま・ここ・わたし」に届いている救いに
出遇えたよろこび

語句説明

智慧・・・

如来の智慧には実智と権智との二つの側面があるといわれている。実智というのは空・無我をさとる智慧ともいわれ、善も悪も優も劣も、男も女も、迷いも悟りもどれも分けてなく平等に見る智慧。この智慧は分け隔てしない智慧だから、無分別智などともいわれる。

権智というのは、善人も悪人も、迷いもさとりも平等に見る智慧を根底に持ちながら、しかもその上で悪を善に導き、迷いをさとりに導くときに、善、悪、迷、悟を区別、分別して知らなければならない。この衆生を救うときにはたらく智慧が権智である。

有量の諸相・・・

如来の智慧のはたらきの無量、無限であるのに対して、我々の世界は何一つとして有量、有限でないものはない。有量であるわれわれの世界のものは、すべてそれぞれの姿、形を持っているから、諸相といわれる。

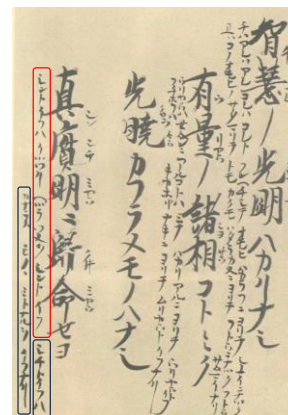
光暁・・・

智慧の光明が無明の闇を破るのを暁に喩える。

「真」… 嘘や偽りがいないこと
「実」… 必ず衆生を救い遂げるということ



真実明
「真」といふは、偽り詭わぬを「真」といふ。
「実」といふは、必ず物の実となるをいふなり。



「帰命せよ」という表現について

林 智康『浄土和讃』

各和讃の終わりに、それぞれ「帰命せよ」と述べられています。この「帰命せよ」の語は「正信偈」の冒頭にある「帰命無量寿如来 南無不可思議光」の「帰命し」・「南無したてまつる」の二語と深く結びついています。「正信偈」の「帰命し」・「南無したてまつる」は親鸞聖人ご自身が光寿二無量の徳をもたれた阿弥陀如来に帰命に南無したてまつると述べられ、和讃の「帰命せよ」は親鸞聖人が他の人々に、阿弥陀仏に帰命せよと述べられているのです。すなわちここに親鸞聖人の生き方、「自信教人信（みづから信じ、人を教えて信ぜしむる）」の積極的な態度が窺われます。

多屋頼俊『和讃史概説』

「真実明に帰命せよ」と命令するのは、親鸞聖人が我々に説教しているのではなく、聖人自身が如来から、善き人から聴かれる絶対的な言葉なのである。聖人の和讃が力強い言葉で表現されているのは、実にこの故である。

もしまたこのたび疑網に覆蔽せられば、かへつてまた曠劫を経歴せん。誠なるかな、撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。（『教行信証』総序）

もしまた、このたび疑いの網におおわれたなら、もとのように果てしなく長い間迷い続けなければならないであろう。如来の本願の何とまことであることか。撰め取ってお捨てにならないという真実の仰せである。世を超えてたぐいまれな正しい法である。この本願のいわれを聞いて、疑いためらってはならない。

智慧の光明はかりなし 有量の諸相ことごとく
光暁かぶらぬものはなし 真実明に帰命せよ

（現代語訳）

阿弥陀仏の智慧の光明は限りがない。迷いの世界のもので、照らされないものはない。真実の智慧の光である真実明に帰命するがよい。